

令和4年度入学（一般選抜 前期日程）試験問題の出典

看護学部

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	－	稲垣 栄洋	雑草はなぜそこに生えているのか	筑摩書房, 2018年, pp.177-190 より, 一部改変	筑摩書房

令和4年度 一般選抜・前期

看護学部

小論文 (60分)

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、4ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問に答えなさい。(100点)

アメリカの哲学者ラルフ・W・エマーソン(1803-82)は、雑草を以下のように定義した。

「雑草とは、いまだその価値を見出されていない植物である」

雑草は、役に立たない邪魔者と烙印らくいんを押されて、初めて「雑草」となる。

道ばたに生える名もない草を、「役に立たない邪魔者」と考えれば、それはただの雑草に過ぎないが、それはまだ見ぬ価値ある植物なのかも知れない。雑草かどうかを決めるのは、私たちの心なのである。

これは何も、雑草だけの話ではない。エマーソンは、私たちが雑草の価値を見つけられずにいるように、私たちの身の回りには価値あるものにあふれているはずだ、と言っているのだ。価値あるものは、どこか遠くにあるわけではない。それは、私たちの足元にあるのかも知れない。そして、もしかすると、見出されていない価値は、あなた自身の中にあるかも知れないのである。

雑草の話をしよう。

そう言うと、また、「雑草のように耐えて頑張れ」とよくある説教をするのだろうと嫌われてしまうかも知れないがそうではない。

「雑草は踏まれても踏まれても 」と言われる。この四角い空欄の中には、どんな言葉が入るだろうか。

よく言われるのは、「踏まれても踏まれても立ち上がる」という言葉である。

だから、「雑草のように何があっても立ち上がれ」などと言うつもりはない。なぜなら、本当は、踏まれた雑草は立ち上がらないからである。

雑草をカンサツしていると、雑草は踏まれても立ち上がるというのは、正しくないことがわかる。

⁽¹⁾雑草は、踏まれたら立ち上がらない。よく踏まれるところに生えている雑草を見ると、踏まれてもダメージが小さいように、みんな地面に横たわるようにして生えている。

「踏まれたら、立ち上がらない」というのが、本当の雑草魂なのだ。

たくましいイメージのある雑草にしては、あまりにも情けないと思うかも知れない。

しかし、本当にそうだろうか。

そもそも、どうして立ち上がらなければならないのだろう。

雑草にとって、もっとも重要なことは何だろうか。それは、花を咲かせて種子を残すことにある。そうであるとすれば、踏まれても踏まれても立ち上がるというのは、かなり無駄なことである。そんな余分なことにエネルギーを使うよりも、踏まれながらどうやって花を咲かせるかということの方が大切である。踏まれながら種子を残すことにエネルギーを注ぐ方が、ずっと合理的である。だから、雑草は踏まれながらも、最大限のエネルギーを使って、花を咲かせ、確実に種子を残すのである。

踏まれても踏まれても立ち上がるやみくもな根性論よりも、ずっとしたたかで、たくましいのである。

雑草は踏まれたら立ち上がらない。

しかし、「雑草は踏まれても踏まれても、必ず花を咲かせて種子を残す」。

大切なことは見失わない生き方。これこそが本当の雑草魂なのである。

もちろん、私たち人間は子孫さえ残せばそれで良いというほど単純な生き物ではない。

それでは、あなたにとって大切なこととは何だろう。幸いなことに人間は、それを考える脳を持っている。人間にとっては、大切なことを探すことも、また生き方なのである。

人気グループであるスマップのヒット曲「世界に一つだけの花」に、こんな歌詞がある。

「ナンバー1にならなくてもいい。もともと特別なオンリー1」

この歌詞に対しては、2つの異なる意見がある。

1つは、この歌詞のとおり、オンリー1が大切という意見である。

世の中は競争社会だが、ナンバー1にだけ価値があるわけではない。私たち一人ひとりには特別な個性ある存在なのだから、それで良いのではないか、という意見である。

一方、反対の意見もある。世の中が競争社会だとすれば、やはりナンバー1を目指さなければ意味がない。オンリー1で良いと満足してはいけけないのではないか、という意見である。

オンリー1か、それともナンバー1か。あなたは、どちらの考えに賛成するだろうか。

じつは、生物の営みを見回してみると、自然界には、この歌詞に対する明確な答えが示されている。

生物の世界の法則では、ナンバー1しか生きられない。これが、厳しい鉄則である。

「ガウゼの法則」と呼ばれるものである。

ソ連の生態学者ゲオルギー・ガウゼ(1910-86)は、ゾウリムシとヒメゾウリムシという2種類のゾウリムシを1つの水槽でいっしょに飼う実験を行った。すると、水や餌が豊富にあるにもかかわらず、最終的に1種類だけが生き残り、もう1種類のゾウリムシは駆逐されて、滅んでしまうことを発見した。こうして、強い者が生き残り、弱い者は滅んでしまう。つまり、生物は生き残りを懸けて激しく競い合い、共存することができないのである。

ナンバー1しか生きられない。これが自然界の厳しい掟^{おきて}である。自然界でナンバー2はあり得ないのである。なんという厳しい世界なのだろう。

しかし、不思議なことがある。

ナンバー1しか生きられないのであれば、この世には1種類の生き物しか存在できないことになる。それなのに、自然界を見渡せば、さまざまな生き物が暮らしている。ナンバー1しか生きられない自然界に、どうして、こんなにも多くの生物が存在しているのだろうか？

じつは、ガウゼの実験には続きがある。

ゾウリムシの種類を変えて、ゾウリムシとミドリゾウリムシで実験をしてみると、今度は、2種類のゾウリムシは1つの水槽の中で共存をしたのである。

どうして、この実験では2種類のゾウリムシが共存しえたのだろうか。

じつは、ゾウリムシとミドリゾウリムシは、棲む場所^すと餌が異なるのである。ゾウリムシは、水槽の上の方にて、浮いている大腸菌を餌にしている。一方、ミドリゾウリムシは水槽の底の方にて

て、酵母菌を餌にしている。

このように、同じ水槽の中でも、棲んでいる世界が異なれば、競い合う必要もなく共存することが可能なのである。つまり、水槽の上のナンバー1と水槽の底のナンバー1というように、ナンバー1を分け合っているのだ。これが「棲み分け」と呼ばれるものである。

同じような環境に暮らす生物どうしは、激しく競争し、ナンバー1しか生きられない。しかし暮らす環境が異なれば、共存することができるのである。

ナンバー1しか生きられない。これが自然界の鉄則である。それでも、こんなにもたくさんの生き物がある。つまり、すべての生き物が、どこかの部分でそれぞれナンバー1なのである。

ナンバー1であることが大事なのか？ オンリー1であることが大事なのか？

この答えはもうおわかりだろう。

すべての生物はナンバー1である。そして、ナンバー1になれる場所を持っている。この場所はオンリー1である。つまり、すべての生物はナンバー1であると同時に、オンリー1なのである。

このナンバー1になれるオンリー1の場所を生態学では、「ニッチ」という。ニッチはそれぞれの生物が固有に持つものである。ニッチは場所の場合もあるし、餌の場合もあるし、環境の場合もある。「ニッチ」とは、もともとは、装飾品を飾るために寺院などの壁面に設けたくぼみを意味している。やがてそれが転じて、生物学の分野で「ある生物種が息する範囲の環境」を指す言葉として使われるようになった。生物学では、ニッチは「生態的地位」と訳されている。1つのくぼみに、1つの装飾品しか飾ることができないように、1つのニッチには1つの生物種しか住むことができない。

マーケティングではニッチ戦略という、小さな隙間のような意味として使われるが、生物にとっては単に隙間を意味する言葉ではない。すべての生物が自分だけのニッチを持っている。大きいニッチもあれば、小さいニッチもあるが、ジグソーパズルのピースがぴったりと組み合わさるように、生物はニッチを分け合っている。仮にニッチが重なれば、重なったところでは激しい競争が残り、どちらか1種だけが生き残る。まさにゾウリムシの実験が示したとおりだ。

雑草は、競争を避けて攪乱かくらんのあるところに生えるというのが、生存戦略だ。しかし、雑草の中にもさまざまな種類がある。植物は集まって生えているので、どのようにニッチを分け合っているのかわかりにくい、無秩序に生えているように見える草むらであっても、植物がニッチを分け合って共存していると考えられている。

勘違いしてはいけないのは、オンリー1のナンバー1を目指すという先述の話は、「生物の種」の話ということである。たとえば、私たちは人間という種であり、おそらくは知能を発達させて自然を都合よく作り変えるというオンリー1でナンバー1の種ということになるのだろう。

私たち一人一人は、生物種の中の「個体」だから、種という集団の中で、必ずしもニッチを棲み分けなければならないということではない。

しかし、ナンバー1になれるオンリー1を探すという生物の世界の営みは、^(A)生きづらい人間の現代社会を生き抜くのに、とても役に立つ考え方であるように思う。

(中 略)

個性を磨くときには、「こうあるべき」という[ア]を疑って、捨ててみることも大切だろう。雑草も、「生き抜くには競争に強くならなければならない」「光を得るためには、縦に高く伸びなければならない」という[ア]とは違うところで成功しているのである。

生物は不均一でバラバラである。しかし、それでは理解するのに不便なので、人間は平均値を取る。そして平均値で、その集団を代表させるのだ。学力テストのような数値のまとまりでは平均値を出すことはできる。しかし、それは学力テストという1本の物差しで測っただけの数値だ。生物は、もっとたくさんの物差しを持つ個性的な存在である。平均値は、人間が管理するのに都合が良いように、1本の物差しだけを取り出して計測し、足して、割っただけの数値に過ぎない。そして、平均値から、あまりに外れた値は、「異常値」としてキキヤクする。しかし、得てして平均値から遠く離れた異常値⁽²⁾が生き残ったり、新たな進化を生む原動力になったりするのが生物の世界だ。

雑草の世界を見てほしい。小さいものも大きいものもある。早く芽を出すものも、遅く芽を出すものもある。雑草にとって大切なのは、それぞれが「違う」ということで、どれが優れていてどれが劣っているということではない。「個性」には平均的な個体もなければ、平均以下という言葉もないのだ。

あるいは私たちは、よく「普通」という言葉を使う。しかし、「普通」とは何だろう。平均値が普通なのだとしたら、「普通」というものは、存在しない。「普通」というのは幻の存在なのだ。

人間の世界では、「普通」というのは、「こうあるべき」という存在だったりする。人間の思う「こうあるべき」の⁽³⁾コリ固まった塊が「普通」である。

しかし、雑草は、「こうあるべき」でないところで勝負して、成功しているのである。

(稲垣栄洋『雑草はなぜそこに生えているのか』、筑摩書房、2018年、pp.177-190より、一部改変)

問 1 下線部(1)~(3)を漢字で表しなさい。

問 2 空欄[ア]にあてはまる適切な語句を答えなさい。

問 3 人間の世界における「普通」という価値観に対する作者の考えを、100字以内で答えなさい。

問 4 二重下線部(A)「ナンバー1になれるオンリー1を探すという生物の世界の営み」の考えを生かして、「現代社会の人間関係」を生き抜くことに対するあなたの考えを、具体的な例や経験を挙げ、600字以内で述べなさい。